

私たち一行は聖書では「塩の海」と呼ばれている死海のほとりの赤茶けた低地をバスで20キロほど北上して「マサダの要塞」遺跡に到着しました。マサダは聖書とは関係のない場所ですが、ユダヤ民族の悲劇の舞台です。標高 400m の独立した菱形の台地は天然の要塞としてうってつけだったのでしょう。私たちはロープウェイで 400m を登りましたが、切り立った山肌に「蛇の道」と名付けられた登山道がくねくねと付いていて、歩いて登る人もいました。



マサダの遺跡

登り切ったところに二重の城壁、門があり、要塞が整然とつくられた様子が分かる遺跡が発掘されていました。ヘロデ王がこの要塞を冬の離宮とし、巨大な貯水槽、食料倉庫、浴場という住居空間はもとより、菜園、広場などすべて備わった難攻不落の要塞にしたのです。特に貯水槽や用水のシステムなど古代の人の知恵に驚くばかりでした。残っている浴場床のモザイクも立派なものでした。また、死海を目の前に眺める絶景の地でもあります。

ローマの直轄下、抵抗するユダヤは紀元70年に陥落しましたが、その後2年以上も、熱心党の過激派約1,000人がここに立てこもりました。ついには、女子供7名以外は自決したとされています。民族の誇りを示したいという悲劇です。歴史家となったヨセフスが投降し、この戦争の記録が今に伝えられています。ローマ軍は兵糧攻め、更には斜面に壘を築きあげて攻撃したとのこと。駐屯基地をマサダの山裾に数か所設営して、その正方形の遺跡もマサダから眺めることが出来ました。権力によって、人間が奴隷とされ、命を枯らされた台地のように見え、寂しさも風に乗って吹いているような気分になりました。喉がカラカラに乾いてしまい、マサダ博物館でザクロのフレッシュ・ジュースを飲み、その美味しさで生き返ったような気がしました。

マサダから死海に沿って、更に北上しながら、ダビデの逃亡先の要害、エン・ゲディの緑地をチラリと眺め、死海の西北端の地、クムランに到着しました。クムランは荒野の奥深い所にあるのではと思っていましたが、地図で見るとエルサレムやエリコから直線距離で20キロの場所です。また、岩山も低く、ここに山羊や羊を追ってくるベドウィン族も容易に歩き回れる所だということも分かりました。



写本が見つかった洞窟

1947年に、洞窟の中から聖書の写本が発見され、世界に衝撃を与えた場所です。ここにも、住居の遺跡が残っていて、その中に遊歩道があって、見学することができました。特に貯水池と沐浴場が特徴的でした。ここに住んだクムラン教団(エッセネ派)の人々は聖書を学び、財産を共有し、世俗を離れ、禁欲的な清い生活を熱心に送っていた人々だったとのこと。イエス様の荒野の誘惑の記事は、彼らの問いに答えたものではなかったか、それにしても

原理主義的、排他的な生活だったようだと言ったガイドは説明しました。エルサレム陥落の時、聖書の写本をクムランの洞窟の奥深くに隠し、信仰の継承を願ったようです。茶色の山肌、土から、灌木が生え、野生の草花があちこちに咲いていて、廃墟に彩りを添えていました。